

春を告げる『山焼き』

清水 勝

伊豆高原のリゾートホテルから、「ワーケーション」は如何ですかとのメールが届いた。「感染症対策を徹底して、ズーム活用やテレワークによって仕事を快適に行える場を提供します。気分転換に温泉も良し、相模湾の大パノラマを観るも良し」という内容で、二泊以上の条件はあるものの、正月料金に比べると4分の1の価格になっている。

仕事をする訳ではないが、この企画に乗っかろうと出掛けた。人との接触を避けるべく車で移動し、食料・飲み物は全て持参し、キッチン用具や食器等は備え付けを活用。六人用の3LDKの部屋に家族四人で過ごし、温泉に入る毎に部屋で飲み、そしてまた飲み、食べた。

二月十四日は大室山の山焼きで、本来は観光客が溢れるイベントだが、「密」を避ける為、山頂のお鉢焼きは無観客、点火の一般参加は中止といった状況で、人出は消防団の方ばかり。幸いにも部屋から眺められ、その気分だけは味わえた。

山焼きといえば、一月下旬に行われる奈良の若草山が有名だが、今年は規模を縮小し、山には入れなかったようだ。また、カルスト台地を包む日本最大級の秋吉台の山焼きは、二月二十八日に行われたが、これも一部の行事は簡略された。三月十日に予定されていた箱根仙石原の山焼きは昨年に続き中止となった。

世界的には大規模な山焼きは大気汚染の原因となることから制限が加えられているが、日本では特定の場所・時期に限定されており、観光以外に山焼きの意義は大いにある。

何と言っても、山焼きは春の芽吹きを促進する。灰が土壌にミネラル分を補給し、地表に陽光が射し込むことに依って土中の芽の成長に役立つ。また、スキの立枯れや枯れ葉の堆積物を除去する役割もある。さらに、ダニやアブラムシの発生と、つる性植物の繁茂を防ぐ。山焼きの地は萱場として親しまれている所であり、山焼きをしなければ、やがて低木類の侵入により森林化してしまう。

春の山焼いたあとから笑ひけり

子規